ローマ人への手紙六九回質問

4　ですから、私の兄弟たちよ。あなたがたもキリストのからだを通して、律法に対して死んでいるのです。それは、あなたがたがほかの方、すなわち死者の中からよみがえった方のものとなり、こうして私たちが神のために実を結ぶようになるためです。

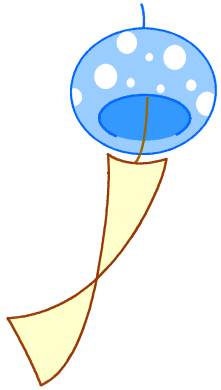
（ロマ七章四節／新改訳2017）

（問一）クリスチャンにはどんな特権が与えられていますか。

（問二）クリスチャンはどんな実を結びますか。

クリスチャンの特権

（ロマ七章四節）



クリスチャンには様々の特権が与えられています。この特権に目をやらず、やたらとつぶやいてばかりいる人がいたとしたら、クリスチャンとして何と大きな損失をしているのでしょうか。

クリスチャンはキリストと結婚したと比喩的に言われております。クリスチャンの特権はそのことと関係しています。結婚をすると、普通は夫の姓を名のるようになります。わが国の法律ではどちらの姓を名のってもいいようになっていますし、韓国では夫の姓を名のらず、元のままの姓を生涯通していますが、世界的に見れば、これはむしろ例外であって、普通は夫の姓を名のります。クリスチャンもそうです。わたしたちがクリスチャンと呼ばれるのは、キリストの名で呼ばれているのです。クリスチャンということばは、もともとシリヤのアンテオケで呼び始められました[1]が、これは「キリス

トに属する者」という意味でした。[2]

ですから、わたしたちがクリスチャンという名前を使う時、キリストに属する者、キリストの花嫁という意味があるのです。つまり、キリストのすばらしいもろもろの特権にあずかることができるわけです。キリストのお名前をもって呼ばれることの特権は、どのようなものにもまさってすばらしいものです。キリストのお名前は「すべての名にまさる名」であり、「イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ[3]」る権威を持っています。ですから、賛美歌作者も次のように歌っています。

「イエス君の御名にまさる名はなし、
御神のみこころ世に現わせり。
わが君イエスよと喜び歌う、
尊き御名こそ、たぐいもなけれ。[4]」

キリストと結婚したことによって与えられる特権は、ただそのお名前を使わせていただけるということだけではありません。キリストと結びつけられたわけですから、キリストと同じ立場が与えられました。そのことについては、パウロがコリント教会への手紙の中で、次のようにしるしています。

「あなたがたが、キリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖と贖いとになられたのである。[5]」

これは実に驚くべきことです。わたしたちはキリストと結婚したことによって、キリストの義と聖と贖いがわたしたちのものとして与えられています。キリストにあってわたしたち

はすべて完全なのです。しかし、もちろんその義も聖も贖いも、わたしたち自身が成し遂げたものではありません。キリストのものなのです。それをキリストがわたしたちのものとして下さったのです。

ところが、悪魔はしばしばわたしたちの無価値なことや失敗だらけなことや罪さえも指摘して、わたしたちに失望を与えようとします。確かにわたしたちは無価値な者ですし、失敗ばかりしていますし、指摘されるような罪もあります。しかし、わたしたちはもうキリストと結婚したのですから、キリストの義の着物を着て、神の御前に立っています。立場としては、義においてばかりでなく、聖においても、からだの贖いにおいても完全です。けれども、今与えられているのはキリストの義の着物であって、わたしたちの実質に関係する聖さは、徐々に与えられていきます。やがてそれは完成します。しかし、大切なことは、いつの日か与えられるかもしれないのではなく、確実に与えられており、聖さの完全な実現も将来、確実なのです。

キリストと結婚した者としての特権は、これらに尽きません。限りなくあります。パウロは、エペソ教会への手紙で、次のようにしるしています。

「キリスト・イエスにあって、ともによみがえらせ、ともに天の座に着かせてくださった。[6]」

「天の座に着く」とは、どういうことでしょうか。「天」と言えば、神の御座です。聖書が神の御座としての「天」ということばを使う時、それは、罪の満ち満ちた悪魔の支配する

「世」に対するものですから、罪のない領域です。つまり、わたしたちはキリストとともに天の座に着かせていただいたことによって、罪から守られているのです。そして、それはまた神の御座であるわけですから、神に近づく特権が与えられていることでもあります。わたしたちが神の御子の花嫁であるという理由で、父なる神に近づくことができるわけです。この特権を、いったいどれだけのクリスチャンが自覚し、感謝し、活用しているでしょうか。

それだけではありません。わたしたちは神の御子キリストの花嫁となったがために、天使の加護を受けるようになりました。まさに、天使によるシークレット・サービスがわたしたちクリスチャンには与えられているのです。これこそ悪魔の攻撃に対する神の行き届いたご配慮であるということができます。

「御使いはみな、仕える霊であって、救いの相続者となる人々に仕えるために遣わされたのではありませんか。[7]」

さらに、わたしたちクリスチャンには、すべてのものが与えられていることを知るなら、思い半ばに過ぐるでありましょう。

「ですから、だれも人間を誇ってはいけません。すべては、あなたがたのものです。パウロであれ、アポロであれ、ケパであれ、また世界であれ、死であれ、いのちであれ、すべてあなたがたのものです。そして、あなたがたはキリストのものであり、キリストは神のものです。[8]」

「キリストと共同の相続人[9]」とされているわたしたちキリス

トの花嫁には、キリストと同じくすべてのものが与えられています。

また、キリストの花嫁とされたわたしたちには、キリストの愛が豊かに注がれます。その愛は花嫁に対するこまやかな愛であり、それは実に驚くべきものです。それは、わたしたちがキリストの花嫁であることを信じる時にわかります。

花婿であるキリストは、「あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方[10]」です。わたしたちがつまずかないように、いつも守っていてくださいます。そして最後の日に、神の御前に立つことができるように、傷なき者としてくださいます。

しかし、正確に言えば、わたしたちはキリストの花嫁として決められているのであって[11]、正式に結婚するのは、世の終わりです。黙示録では、そのことを「小羊の婚姻[12]」と呼んでいます。その時、永遠の結婚がなされます。わたしたちは、今そのために用意をしているのです。

それでは、キリストとわたしたちが結婚するのは、どういうことを目的としているのでしょうか。「わたしたちが神のために実を結ぶようになるため」です。つまり、わたしたちがキリストと結び合わされるのは、ただ単にわたしたちの罪が赦され、安全が確保され、幸福になるためだけではありません。それは神のために実を結ぶことが目的なのです。それでは、どのような実を結ぶのでしょうか。それは、聖さです。聖さとは、神をほめたたえ、神の栄光のために生きることと

いってもいいでしょう。それは決して感情なのではありません。聖霊の結ばせてくださる実として「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、忠実、柔和、自制」[13]が聖書で教えられていますが、このような実を結ぶのです。

律法と結婚していた時には、何の実も結びませんでした。しかし、キリストと結婚した者たちはみな、神のために実を結びます。キリストが実を結ばせてくださるのです。

注

(1)使徒たちの働き一一章二六節。

(2)「クリスチャン」ということばは（使一一・二六）、原語のギリシャ語では、クリスティアノス（Χριστιανός）ということばが使われています。これは、クリストス（Χρίστος）ということばと、イアノス（-ιανος）ということばの合成語で、「キリスト」と「……に属するもの」が一緒になり「キリストに属するもの」という意味で使われました。

(3)ピリピ教会への手紙二章九―一〇節。

(4)賛美歌一六八番一節。

(5)コリント教会への第一の手紙一章三〇節　協会訳。

(6)エペソ教会への手紙二章六節。

(7)ヘブル教会への手紙一章一四節　新改訳。

(8)コリント教会への第一の手紙三章二一―二三節　新改訳。

(9)ローマ教会への手紙八章一七節。

(10)ユダの手紙二四節　新改訳。

(11)コリント教会への第二の手紙一一章二節。

(12)ヨハネの黙示録一九章七節　新改訳。